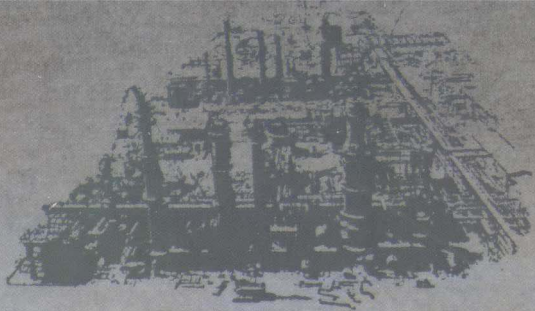


城山三郎



海外とは日本人にとって何か

経済最前線をゆく

海外とは日本人にとって何か
経済最前線をゆく

城山三郎

文藝春秋

1927(昭和2)年、愛知県に生まれる。46年東京商科大学(現一橋大)入学。卒業後愛知学芸大学で景気論を講ずるかたわら書いた「輸出」で文学界新人賞を受賞。59年「総会屋錦城」で第40回直木賞を受賞した。著書に「大義の末」「小説日本銀行」「鼠」「落日燃ゆ」「黄金の日日」など多数。

海外とは日本人にとって何か

昭和五十四年二月十日 第一刷

昭和五十六年六月一日 第十刷

定価 八二〇円

著者 城山三郎

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三)二六五・一二一一

印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁等の場合は

お取替致します。

海外とは日本人にとって何か／目次

大地燃ゆ　ヘイラン

7

火傷^{やけど}の国に生きて　△アラブ首長国連邦△

32

さいはてからのコンコルド　△オマーン・バハレーン△

51

英国病の病床にて　△イギリス△

69

ECで見た日本の魔法　△イギリス・西ドイツ△

87

熱き血の人々　△メキシコ△

105

大統領の城下町にて 〈米国・アトランタ〉

127

眠れる巨獣の目ざめ 〈アメリカ〉

140

オーロラ降りそそぐ下で 〈カナダ〉

179

インディアン墓地の落日 〈カナダ〉

202

闇深き谷間より 〈カナダ〉

219

あとがきに代えて

231

装幀 坂田政則

海外とは日本人にとって何か

大地燃ゆ ヘイラン

大安の日曜日、羽田を発った。

イラン航空八〇一便。行先はテヘラン、北京経由の直行便である。中近東へのルートは他にもいろいろあるが、とくにこの便を選んだのには、二つの理由があった。

ひとつは、「中近東へのビジネス特急」と宣伝しているように、最短距離を行くため、かなりの時間節約になりはしないかと思つたこと。北京経由で中国大陸を横断してとぶということにも、何か新鮮な発見がありそうな気がした。それに、いまひとつは、産油国の王者イランのエアラインであるところから、機中でも石油成金の姿を観察できるかも知れぬと期待。このため、ファースト・クラスにのりこむことにした。

ところが、この期待は、二つともはずれた。

夕方、予定より半時間おくれで離陸したボーイング七〇七型機は、夕陽を右側から浴びながら、とび続けている。北京へ向かうなら、夕陽を正面から浴びてとぶはずではないのか。

西へとばずに、一度は南へ下りたわけで、この遠回りのため、一直線なら三時間足らずで着くはずの北京まで、四時間四十分かかった。スチュワーデスにたしかめたところ、やはり、上海近くへ出たあと、反転して北京へ入るコースだそうで、原因は、韓国の航空識別圏を避けるためということであつた。目に見えぬ政治の壁がたちはだかっている。

漆黒の闇となった大陸に、ほのかに集落の灯が見えてきた。つつましい生活を反映して、きらめくというより、かすかににじむような灯である。

もっとも、北京空港の建物には、ネオンがあつた。一面の闇の中に、マルクス・レーニン主義と中国共産党をたたえる文字が赤くきらめき、毛沢東の巨大な壁画が照明に浮き出ている。

給油の時間、がらんとしたターミナル・ビルの中に入った。十年ほど前北京を訪れたときと同じ建物に思えたが、売店が開き、灰皿や酒、花瓶などを売っている。夜のせいもあって、広い待合室には、工人服姿の中国人がまばらに居るだけ。それに、中国人一人が見送りに来ている数人の大男の白人グループがあつた。

一時間ほどしたとき、工人服姿の小肥りの女が寄ってきて、
「フライング・ザ・グリン飛行機に乗れ」

とだけいった。これも一種の公務員なのであろう。無言で客たちを引率し、飛行機の下へ。そこで、片手をポケットにつっこんだまま、搭乗券を受けとる。

再搭乗して、機内を見回す。

ツーリスト席では、日本人の多いビジネスマン風の客が、かなり減っていた。ファースト・クラスには、空港待合室で見かけた数人のグループがのりこんできた。二メートル近い大男、そろってひげをはやし、共通して、ややまるみを帯びた大きな鼻、下り眉、どんぐり眼。愛嬌のある顔でもあるが、これがイラン人に多い風貌のようであった（もともと、イランに多いのは、アリアン系人種で、同じ中近東でも、アラブとは人種を異にしており、アラブと一括されることをきらう、という）。

男たちは、四十前後。もちろん、石油成金のようではない。土産物が多いので、航空会社関係の人間でもない。中国とイランの間でどういう交流があるのか、技術者か役人といった風であるが、最後まで素姓がつかめなかった。

素姓がわからぬといえば、背広姿の別の大男が、ときどき客席を見渡して歩いて行く。そうかと思うと、その男が操縦席のすぐ後に屈みこんでいたりして、不気味であったが、私服警官とわかった。

窓の外は、闇が続いた。イラン発東京行きのも、中国上空を通るのは、やはり夜間であって、空から中国大陸を眺めることのできぬ仕掛けになっているようであった。

北京から八時間あまり、さらに夜ばかり続き、テヘランに着いても、まだ夜明前であった。夜ばかり続く旅というのも、意外に神経が疲れる。

イランは親日的で、テヘラン空港も、日本人はほとんどフリーパスときいていたが、この日は、スーツケースをあけさせられた。赤軍派の動きが伝えられ、中近東一円に警報が出ているらしい、

ということであった。

この種のことは、珍しくないらしい。とぼちちりを受けて、ある商社の若い社員は、カイロへ出張したが、入国できず戻されたし、別の商社では、日本からの新任の駐在員が、赤軍派の一人の手配写真と本人もびっくりするほどよく似ていたため、そのまま警察へ連行され、容易に釈放されなかった。

首都テヘランは、海拔一四〇〇メートルの高地に在り、雪をいただいた山々が目の先に迫っていた。広い並木道もあるかなりの近代都市で、人口約四百万。さらに膨張を続け、周囲の灰褐色の台地では、ビルや住宅地の建設が、ゆったりした速度で進んでいる。

交通機関は、車。高速道路であろうとなかろうと、車は猛烈なスピードで走る。交叉点など、鼻先で突き合わんばかりである。

「野性の目でにらみ合って、ひるんだ方が負け」とは、ある駐在員の解説。しかも、車のナンバーは、みみずのおどったようなベルシャ文字だけ。事故や事故処理がこわいので、自分では運転しない駐在員が多い。

日本車も見かけたが、ベンツが目立つ。工業化を推進しているので、国産車もある。世界中から選りどり見どりで部品を集め、工程は組立てと塗装ぐらいといわれるが、とにかくその国産車保護のため、完成車の輸入には、高率の関税がかけられる。

それでも、結構、外車が売れる。イラン人は、ベルシャ帝国の昔から、誇り高い民族。見栄の

ためというか、面子^{めんづ}を重んずるせいだといい、また、一方、インフレが進んでいるので、三年五年経っても、外車の下取価格が落ちないためともいう。

イランなどが引金をひいた石油ショックだが、インフレは産油国にもはね返って、物価騰貴が続き、とくに人口集中のはげしいテヘランでは家賃が高く、給料の半分以上を家賃に割いている駐在員の例もあった。そのため、苦勞の多い海外生活で、さらに赤字がふえるとは、割りに合わない話である。

わたしが泊っていたのは、Hホテル。

イランに限らず、中近東では、航空機やホテルの予約が当てにならない。世界中から人々が殺到してきているため、予約はいつも定員^{オイバー・ブック}超過である。このため、予約した宿へ着いても、ことわられる。たとえば詰め寄っても、

「あの時点では部屋があったから、予約はたしかに受けた。だが、いまは部屋のないことがたしか。だから、泊めようがない」

といった答が返ってくると、わたしは出発前におどかさされたが、幸い、手配がよかったせいか、わたしも同行のA記者も、一度も憂き目を見ることなしで済んだ。

Hホテルは、まだ新しく、なかなか快適なホテルであった。水の乏しい土地なのに、植木にとりどりの花を咲かせ、大きな鳥が舞っている。夕方から夜にかけては、バーやロビーに客が溢れた。

ただ困ったことは、部屋に電話がかかってきて、受話器をとり上げても、なおベルが鳴りやま

ないこと。それに、エレベーターの一台が、一〇センチ幅ぐらいしかドアが開かず、あとは手動で押し開けねばならなかった（もっとも、この種のことは、その後、アラブ諸国だけでなく、ヨーロッパのホテルでも、しばしば経験した。むしろ、日本の設備の良さに、あらためて感嘆すべきかも知れない）。

空気が乾燥していて、ドアやスイッチにふれる度に、火花が散る。比較的、雨や雪の多い冬から早春にかけても、湿度は三〇パーセント。五〇パーセントを割ると異常乾燥注意報が出る日本のことを思うと、常時異常乾燥である。夏にはさらに乾燥し、湿度は一〇パーセントを切る。唇が割れ、マージャン・パイまで割れるので、冷蔵庫にしまっておかねばならない。イランのひとたちが、濃い紅茶を一日十杯以上のものも、生活の知恵である。

街角や人の集まるところには、国王夫妻の写真が目につく。国王は、若き日の明治天皇といった風貌。美しい王妃は、社会福祉施設の視察などに忙しく、毎日のように、新聞に写真入りで出ている。国民のアイドルに、という意向もあるのであろう。

イランの人口は三千五百万。国土は日本の四・四倍だが、砂漠が多く、灌漑の助けを借りても可耕地は一〇パーセント程度。

史上、二度にわたって、ベルシャ帝国として栄えたあと、アラブ、トルコ、モンゴルなどの異民族に侵され、さらに、ロシアやイギリスの経済支配を受けてきたが、これをはね返したのが、コサック騎兵将校であった現国王の父君である。ただし、第二次大戦中、イランが中立政策をと

っていたにもかかわらず、ソ連とイギリスの侵入を受け、この先王はイギリス軍に軟禁されて、非運の死を遂げた。

代って、当時二十二歳であった現国王が即位。国会の反対を押し切り、国会を解散してまで、農地改革を強行。その後も、「白い革命」と呼ばれる経済開発、文盲撲滅など、一連の近代化政策を押し進めてきた。

世界をさがわがせた石油国有化も、そうした政策の一環で、国際石油資本に挑戦したイラン国営石油会社(NIOC)が、いまや自らの手で、石油の開発から販売に至るまで、大きく手をひろげて来ている。

日本の原油の四〇パーセントは、このイランから来る。このため、両国間貿易では、日本側の大幅入超となる(もつとも、この原油の多くが、メジャーの手を経るというので、イラン側は対日本輸出額に計上しない)。

日本からは、重化学工業製品、鉄鋼、プラント類などが輸出されており、両国間貿易額は七〇億ドルに上り、イランは日本にとってアメリカに次ぐ貿易相手国となっている。

主要産業は、ほとんど国営のため、明治初期の日本を思わせるような政府主導、官僚主導型の経済である。官僚や、官僚に類する人たちの力が強い。彼等は目のさめるような邸に住み、生活も豊かだが、また猛烈に働く、ともいう。

近代的で開明な国王をいただくという王制のシステムが、彼等に思いきった仕事の場を与えているのだが、反動的な旧勢力による巻き返しも考えられ、一方、左派や過激派の動きも心配であ

る。このため、秘密警察を中心とした強大な警察力が存在する。

ホテルやオフィスにはほとんど例外なく盗聴器がセットされていて、商社マンと話をするのに走っている車を使ったという話（田原総一朗氏「通貨マフィア戦争」文藝春秋一九七七年五月号）もあるが、わたしは不用心な性格のせいか、そこまで暗いふんい気も感ぜず、頓着なく、ひとに会い、ひとを訪ねた。

イランにも、さまざまな日本企業が進出していた。砂漠と石油のこの国は、物価も高く、気候など生活環境もよくないが、とにかく、金^{かね}があり、仕事がある。

B社では、四十人の日本人、千百人のイラン人で、米英資本を向こうに回し、残業につぐ残業で、自動車タイヤなどを量産。万事がスローなこの国で、工場建設からフル操業までわずか十一カ月でこぎつけ、注目を集めた会社である。

T社は、二十五人の日本人と二千五百人のイラン人従業員。イランの照明器具の九〇パーセントを生産するなど、家電製品の主力メーカー。風変わりなところでは、年間三〇万台ずつ生産している電気炊飯器と扇風機。炊飯器は日本とちがい、ばさばさでお焦げができるような仕様になっており、扇風機は支柱のところにナイト・ランプといいピンク色の灯がともるようになっていて、これらは一例だが、完成品として輸入される物もふくめ、日本品は品質がよい割りに安いので、評判がいい。

ただ、自国で工業化を進めているイランに対しては、完成品を売る時代はそろそろ終りに近づ